



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	〔展示〕沿革展示室第二期展示「佐藤昌介：北大の牽引者」
Author(s)	井上, 高聡//解説
Citation	北海道大学大学文書館年報, 13, 80-101
Issue Date	2018-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70359
Type	other
File Information	ARHUA_13_006_p80-101.pdf



< 展 示 >

沿革展示室第二期展示「佐藤昌介——北大の牽引者」

1. 沿革展示室第二期展示「佐藤昌介——北大の牽引者」について

2016年11月28日、大学文書館は、札幌農学校第1期生で北大初代総長を務めた佐藤昌介の肖像画（Ⅳ-5）の寄贈を受けた。ご寄贈者は、佐藤昌介の御令孫にあたる佐藤ユリ氏である。貴重な肖像画の受贈を記念して、2017年7月21日より、沿革展示室（大学文書館1階）で第二期展示「佐藤昌介——北大の牽引者」を公開し、佐藤昌介にまつわる約40点の資料を紹介している。同展示は2018年7月まで実施する予定である。

2. 第2期展示「佐藤昌介——北大の牽引者」解説

I. 札幌農学校教頭W. S. クラークと出会い

札幌農学校教頭に就任したW. S. クラークは、開校式演説で入学生に“Lofty Ambition”（高邁な志）という語を用いて向上心に満ちた挑戦を促した。クラークは植物学の講義を担当したほか、課外では聖書講読も行なった。在任は8ヶ月という短期間であったが、カリキュラム編成・附属農場設置・図書館整備などの学校運営面に加え、学生の信条にも大きな影響を及ぼした。佐藤昌介は、19歳の1876年、第1期生として札幌農学校に入学し、クラークと出会った。

II. 札幌農学校第1期生として

岩手県花巻出身の佐藤昌介は、東京英語学校（現東京大学）在学中に、新設の札幌農学校教頭に就任したW. S. クラークらのスカウトに応じて札幌農学校に入学した。クラークの直接の教え子は佐藤ら第1期生のみである。札幌農学校の教員はアメリカ人であったため、農学・植物学・化学・数学・工学・物理学といった講義はすべて英語であった。農学校生たちは当時、最先端の西洋科学を英語で学んだ。また、クラークの提案で課外に聖書講読や弁論術を研ぐ集会「開識社」を開催した。在学中の佐藤昌介は、第1期生の中でも年長で、成績優秀であったこともあり、リーダーといった存在であった。

III. 農業経済学の教授として

佐藤昌介は卒業後、アメリカのジョンズ・ホプキンス大学で歴史学・経済学等を学んだ後、1886年、札幌農学校教授に就任した。農業経済学を専攻した佐藤昌介は、「大農論」などの論文を発表し北海道「開拓」のあり方を論じた。農学校の講義では、「殖民学」を日本で最初に講じたほか、「農業経済学」、「農政学」、「殖民史」、「農業史」、「水産学」、「山林学」、「英語」などの講義も担当した。佐藤昌介の門下からは、北大第3代総長となる高

岡熊雄、東京文化学園（現新渡戸文化学園）を創立した森本厚吉、白樺派を代表する作家有島武郎、北大教授を務めた中島九郎らを輩出した。

Ⅳ．校長・学長・総長として

佐藤昌介は1891年に札幌農学校校長心得に就任して以降、校長・学長・総長として、40年間に渡って北大を牽引し続けた。農学校長在任時には、新渡戸稲造・宮部金吾・南鷹次郎ら農学校卒業生を中心とした教授陣を編成し、幾度か訪れた札幌農学校廃校の危機には政府要路を説き伏せて回避した。1908年に東北帝国大学農科大学として大学への昇格を実現し、1918年には北海道帝国大学としての独立を果たした。佐藤昌介が総長を退任する1930年までに、北大は農・医・工・理学部を擁する理系総合大学へと拡充した。佐藤昌介を「北大の父」と称する所以である。

Ⅴ．佐藤昌介アラカルト

佐藤昌介は、同僚も学生も一言の内に震え上がらせるほどの厳格な人物であったが、非常に尊敬も集めていた。そして、女子教育機関の創設に関わったり、制度的に想定されていなかった帝国大学への女性の入学を支持して実現するなど、女性が学問を学ぶことに深い理解を示した。また、札幌農学校入学前からメソジスト教会に出入りし、在学中に受洗した後は、終生、教会通いを欠かさなかった。信仰について声高に語ることはほとんどなかったが、佐藤昌介には敬虔なクリスチャンという一面もあった。Ⅴのコーナーでは、そんな佐藤昌介の人柄を示す資料を展示する。

3．佐藤昌介略年譜

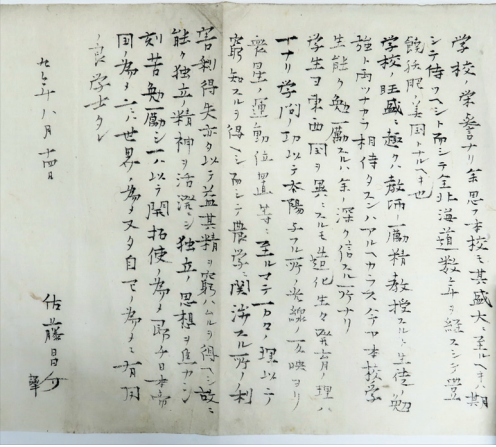
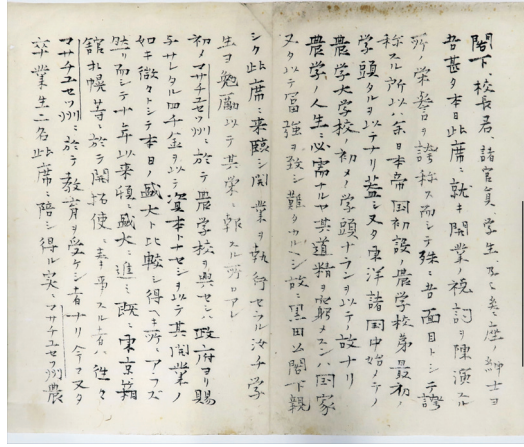
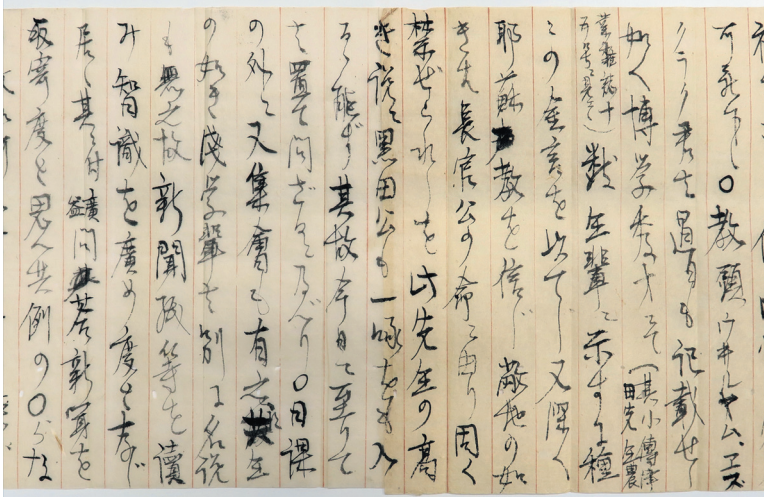
1856年11月	現在の岩手県花巻市に南部藩士佐藤昌蔵の長男として生まれる
1870年1月	藩校作人館で漢学を修業（同窓に原敬ら）
1871年1月	上京し、私塾・大学南校などで英学を修業、横浜でキリスト教に接する
1872年5月	一時、盛岡に帰郷
1874年3月	東京外国語学校（12月に東京英語学校に改組）に入学
1876年8月	札幌農学校に第1期生として入学
1877年9月	函館メソジスト教会宣教師M. C. ハリスから受洗
1880年7月	札幌農学校卒業、農学士学位を受ける、開拓使に就業
1882年7月	職を辞しアメリカへ渡る
1883年9月	メリーランド州ボルティモアのジョンズ・ホプキンス大学に入学
1885年6月	4ヶ月間、ドイツへ留学
1886年6月	ジョンズ・ホプキンス大学で Ph. D. (博士号) 取得
8月	帰国、北海道庁属
11月	北海道庁長官岩村通俊に「札幌農学校ノ組織改正ノ意見」を提出
12月	札幌農学校教授

- 1887年3月 札幌農学校幹事を兼任
1888年11月 論文「大農論」を発表
森有礼文部大臣に「北海道殖民地ニ農学校ヲ必要トスルノ意見」を提出
1889年 スミス女学校（後の北星女学校）顧問
1891年5月 アメリカの経済学者R. T. イリーの著書を『威氏経済学』として翻訳
8月 札幌農学校校長心得・教授
1894年4月 札幌農学校校長・教授
1898年1月 西園寺公望文部大臣に「札幌農学校拡張意見書」提出
1899年3月 東京帝国大学の推薦により農学博士の学位取得
1907年9月 札幌農学校の大学昇格により、東北帝国大学農科大学学長・教授に就任
1913年12月 第2回日米交換教授としてアメリカへ出張
1917年6月 東京女子大学理事
1918年4月 東北帝国大学からの独立により、北海道帝国大学の初代総長に就任
1928年11月 男爵を受爵
1930年12月 北海道帝国大学総長を辞任
1931年3月 北海道帝国大学名誉教授
1932年11月 北海道農会会長
1933年11月 遺愛女学校理事長
1934年4月 八紘学院院長
1935年7月 稲田昌植（佐藤昌介・陽夫妻の次男）と共著で『世界農業史論』出版
1939年6月 5日逝去、8日に北海道帝国大学でキリスト教形式の大学葬を実施



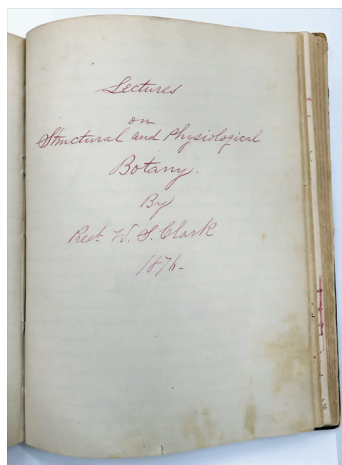
書齋にて（1930年代）

4. 陳列資料目録

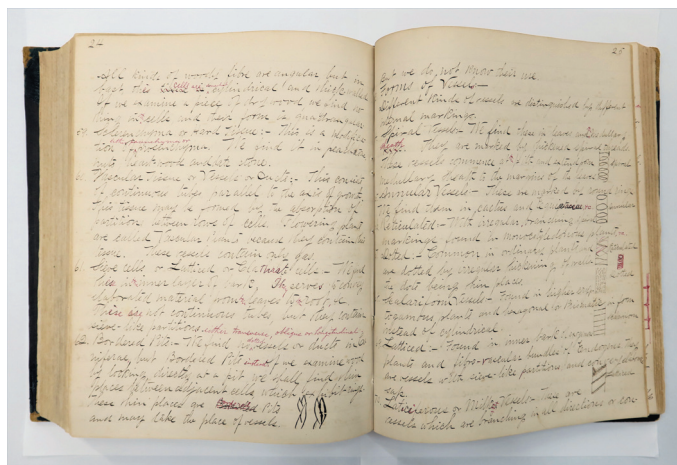
I. 札幌農学校教頭W. S. クラークと出会い	
I-1	W. S. クラーク教頭の開校式演説（佐藤昌介訳、1876年 8 月14日） 札幌農学校簿書047-5 1876年 8 月14日、札幌農学校開業式にあたり、教頭W. S. クラークが演説を行ない、“Lofty Ambition”（高邁な志）という語を用いて第1期入学生に対して向上心に満ちた挑戦を促した。資料は、クラークの英語演説を聞いた第1期生佐藤昌介がその内容を日本語訳した原稿である。
 	
I-2	大島正義宛て大島正健書簡（1876年11月26日） 大島正健関係資料0025 札幌農学校開校から3ヶ月後に第1期生大島正健が実兄に宛てた手紙。クラークが博学であり様々な金言名句を授けてくれること、クラークの高説により黒田清隆開拓長官が禁止していたキリスト教を黙認するようになったことなど記している。
 	

I-3	W. S. クラーク『植物学』講義を記録した受講ノート (1876年)
受講ノート0001	

クラークの講義を記録した佐藤昌介の受講ノート。“Lectures on Structural and Physiological Botany” (植物組織学・植物生理学)。



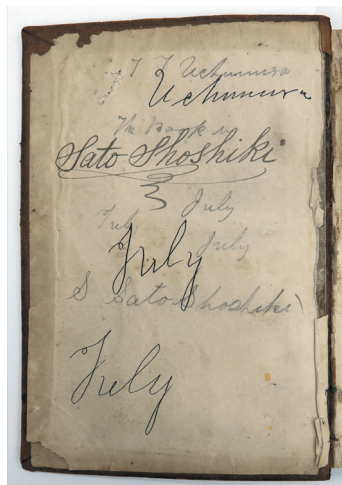
ノート中扉の表題



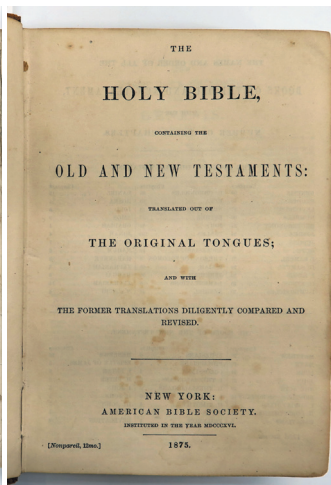
クラークによる朱筆訂正が見られる (クラーク筆)

I-4	W. S. クラークが第1期生 (佐藤昌介、黒岩四方之進) に与えた聖書
沿革資料 (刊行物)	

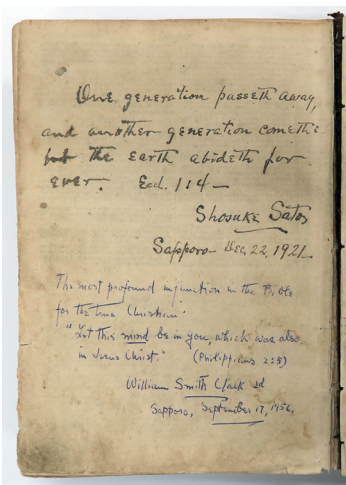
クラークは札幌農学校第1期生にそれぞれの名前を記した聖書を配り、課外に聖書講読を行なった。佐藤昌介には“Sato Shoshiki”と記名した (その他の記名は後の人々の落書き)。佐藤の南部訛りの自己紹介をそのまま記したのかも知れない。布教ではなく、倫理教育を目的としたものであったが、第1期生は大きな感化を受け、後に受洗した。



“Sato Shoshiki”



聖書中扉



佐藤昌介の書込み (1921.12.22.)

I-5

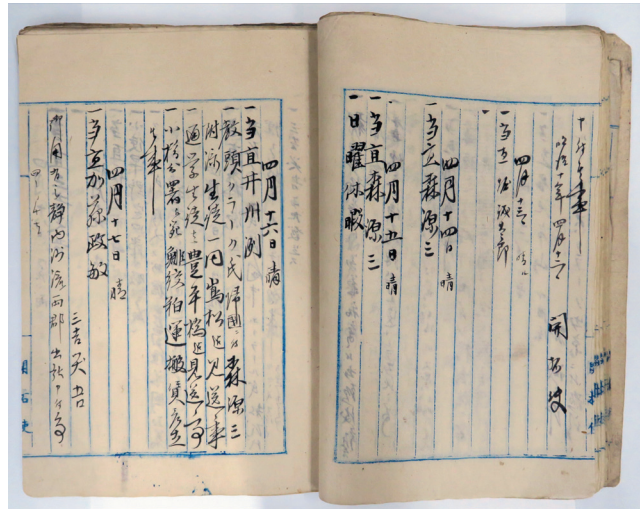
W. S. クラーク離任時の札幌農学校の日誌

札幌農学校簿書050

クラークが札幌農学校を離任する1877年4月16日の学校日誌の記事。生徒一同が島松まで見送ったことを記録している。島松で別れる際、クラークは生徒たちに向けて“Boys, be ambitious”の言葉を残したと、第1期生大島正健が回想している。



W. S. Clark



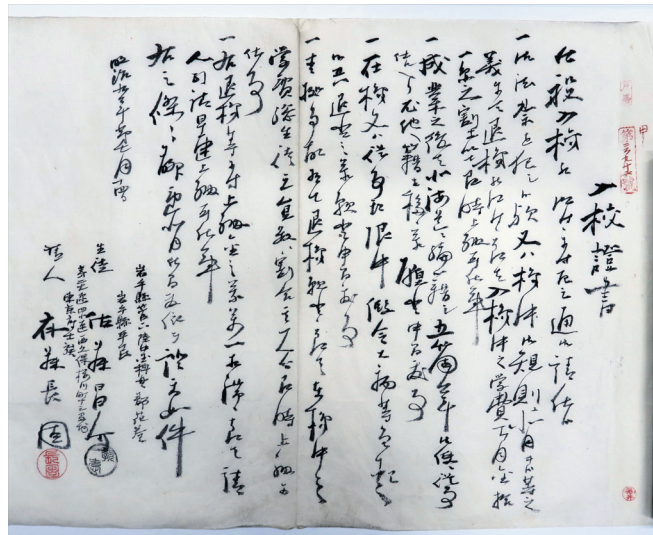
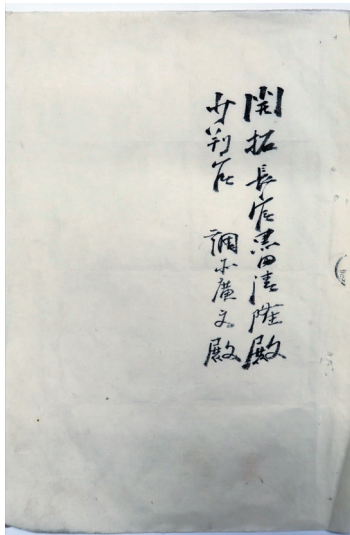
II. 札幌農学校第1期生として

II-1

佐藤昌介の札幌農学校入校証書（1876年7月14日）

札幌農学校簿書047-7

佐藤昌介は、1876年、札幌農学校に第1期生として入学した。農学校在学中の官費支給に対して、卒業後5年間、北海道「開拓」に従事する規定となっていた。佐藤は、年長であり成績優秀であったため、第1期生のリーダー格となっていた。



II-2 札幌農学校第1-5期生の学籍表 (1876-1881年) 札幌農学校簿書041

1876年、札幌農学校第1期生として24名が入学した。内13名は前身校からの「内部進学組」、佐藤昌介ら11名は東京英語学校・開成学校（共に後の東京大学）からの「スカウト組」だった。4年後に卒業したのは「内部進学組」4名、「スカウト組」9名の計13名だった。

II-3 W. S. クラーク在任中の講義時間割 (1877年) 札幌農学校簿書054

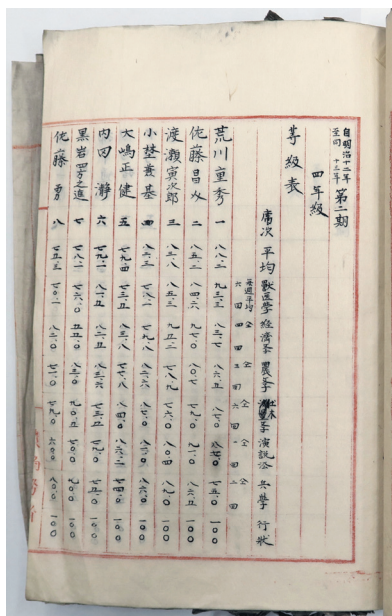
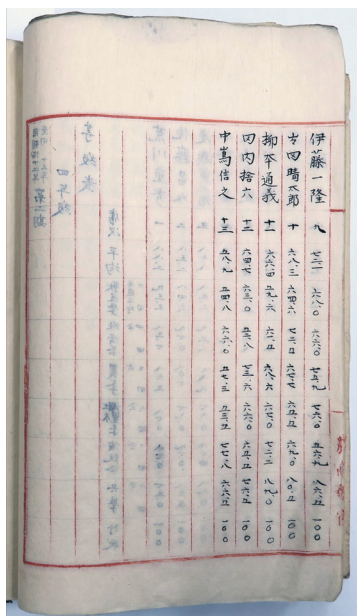
クラークが8:30-9:30に「農学」（実際は植物学）、9:30-10:30に「英学」を講義し、10:30-11:30にはW. ホイーラーが「幾何学」、11:30-12:30にはD. P. ペンハローが「化学」を担当した。講義はすべて英語であったため、午後、学生は午前中の講義内容を懸命に復習しなければならなかった。

II-4

第1期生が4年級（最終学年）のときの成績表（1879-80年）

札幌農学校簿書098

佐藤昌介は在学中の4年間、席次で3番目を下ることはなかった。このときも席次2番で、「経済学」と「弁論法」では最高点を上げている。

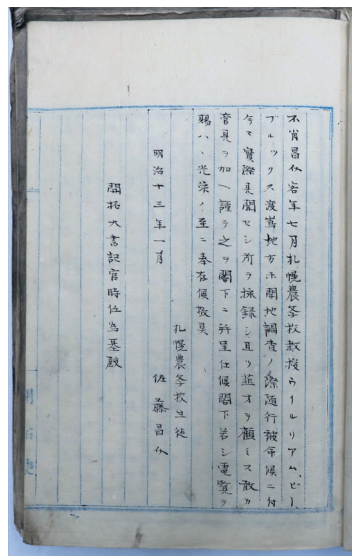
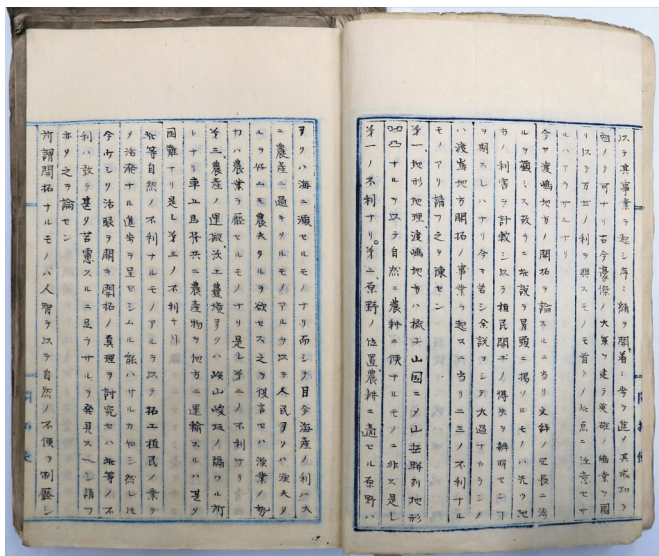


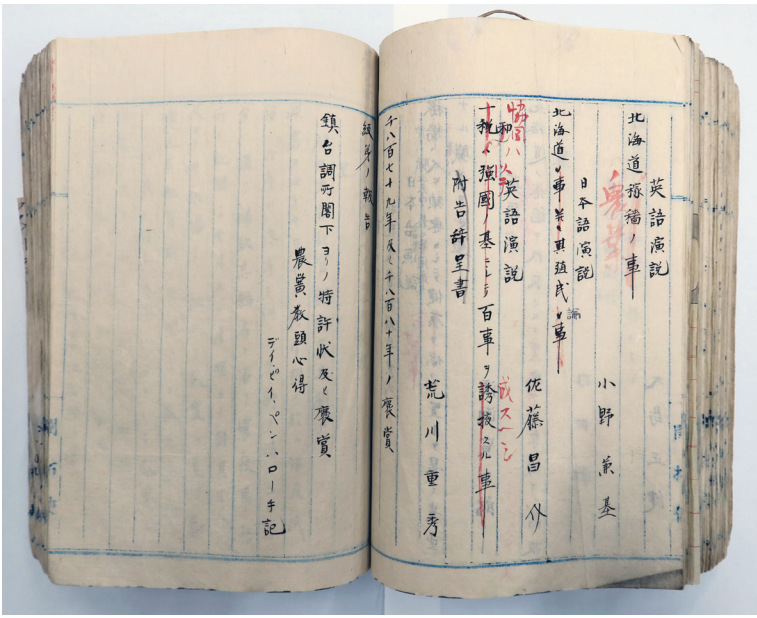
II-5

佐藤昌介「渡島地方巡回報文」(1880年)

札幌農学校簿書089

札幌農学校在学中の佐藤昌介は、1879年7月に外国人教師W. P. ブルックスに随行して北海道渡島地方を調査した。資料は、農学校に提出した調査報告書。未墾地の地形・土質・気候などを調査し、各種農産物の適否を論じている。



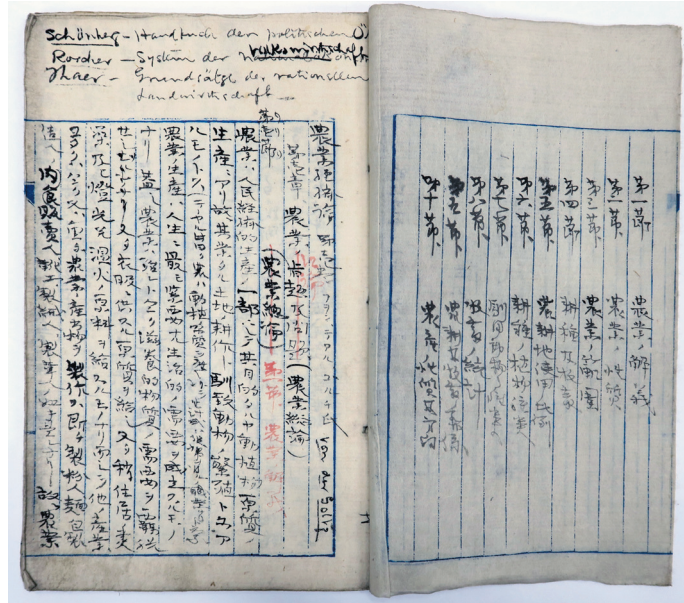
II-6	第1期生卒業式次第 (1880年)
	札幌農学校簿書101
1880年7月10日、佐藤昌介ら第1期生13名は札幌農学校を卒業した。卒業式では、成績優秀な卒業生6名が演説発表を行なった。佐藤は「北海道殖産論」と題した日本語演説を行なった。	
	
II-7	卒業を控えた第1期生13名 (1880年)
	大島正健関係資料0118
前列左から3番目が佐藤昌介。	
	

Ⅲ．農業経済学の教授として

Ⅲ-1 佐藤昌介「農業経済学講義 第壹 農業汎論」(1888年1月)

中島九郎関係資料2014-0003

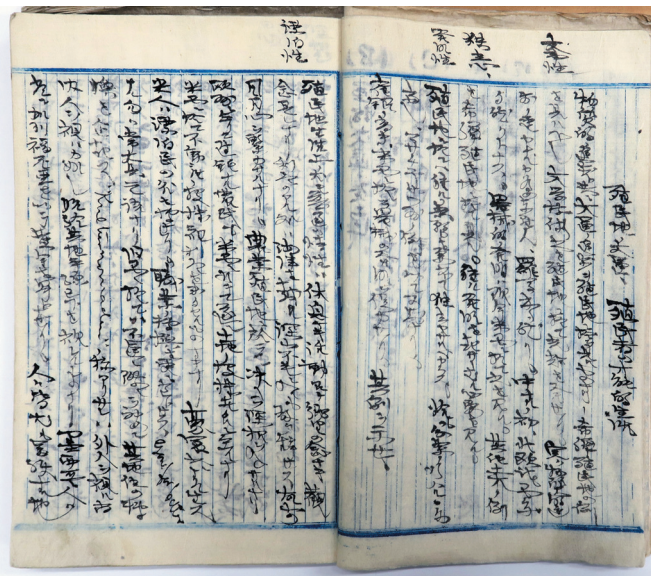
佐藤昌介が教授就任2年目の1888年に行なった「農業経済学」の自筆講義原稿。



Ⅲ-2 佐藤昌介「植民史講義」(1891年1月)

農業経済学教室関係資料0019

佐藤昌介の自筆講義原稿。日本で最初の「植民学」講義の記録に当たる。「植民学」は、近代日本の植民地支配・統治を学術的・理論的に裏付ける役割を果たす一面があった。戦前期、北大は東大と共に「植民学」研究の拠点であった。



Ⅲ-3

佐藤昌介「動物資本論」、「流通資本論」(1901年)

農業経済学教室関係資料0007、0009

佐藤昌介の自筆講義原稿。「動物資本論」は耕作動力や繁殖・畜産を目的として家畜を飼育する農家の経営について、「流通資本論」は農業経営において流通段階にある貨幣資本と商品資本（農産物）の関係について論じている。

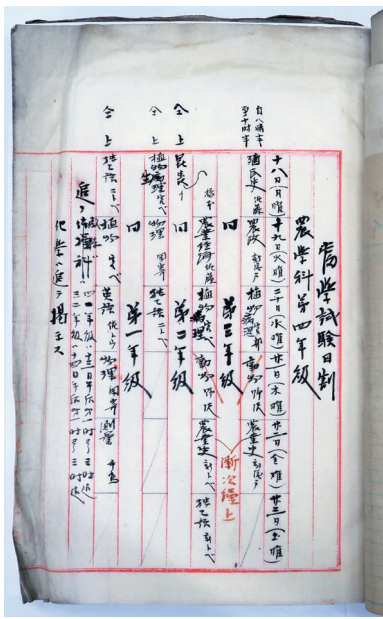


Ⅲ-4

札幌農学校の試験日割 (1893年12月)

札幌農学校簿書906

試験日割りの担当者名から、このとき、佐藤昌介は4年生の「殖民史」、3年生の「農業経済学」、1年生の「英語」の講義を担当していたことが分かる。

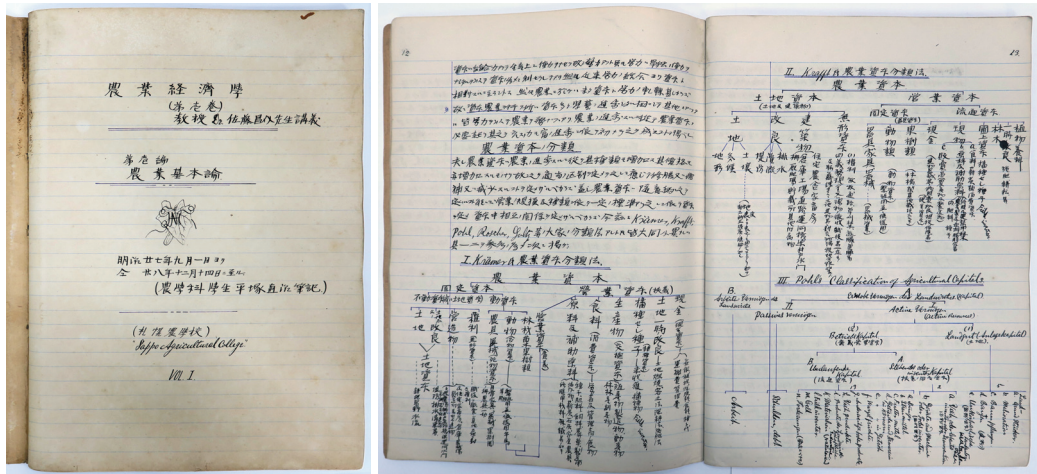


佐藤昌介教授・新渡戸稲造教授と農業経済学演習専攻の3-4年生 (1895年)

Ⅲ-5 佐藤昌介講義「農業経済学」の受講ノート（1894-1895年）

西信子氏・西安信氏寄贈、札幌農学校受講ノート0145

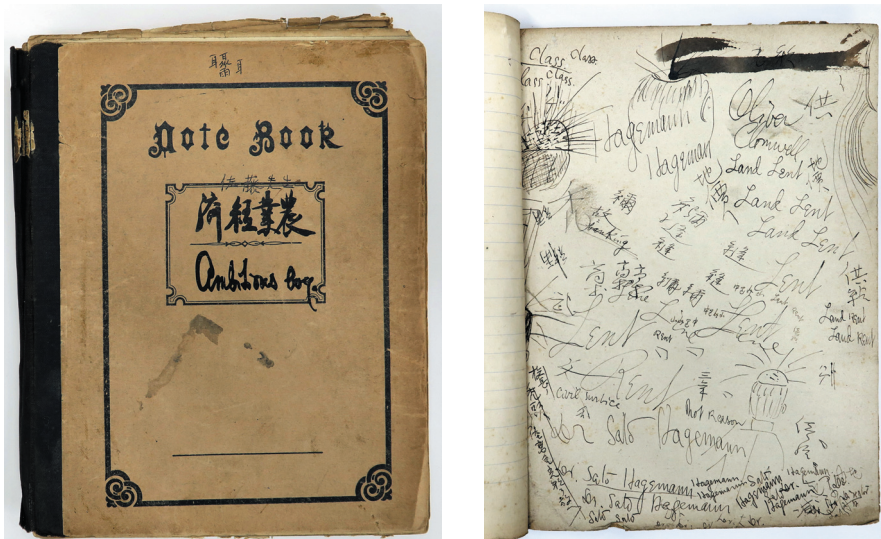
札幌農学校第14期生平塚直治（1873-1946年）が記録した受講ノート。平塚は非常に優秀な学生で、佐藤の講義を細大漏らさず筆記している。平塚は卒業後、北海道製麻株式会社技師となり、後に帝国繊維株式会社（テイセン）取締役を歴任した。



Ⅲ-6 佐藤昌介講義「農業経済学」の受講ノート（1904年）

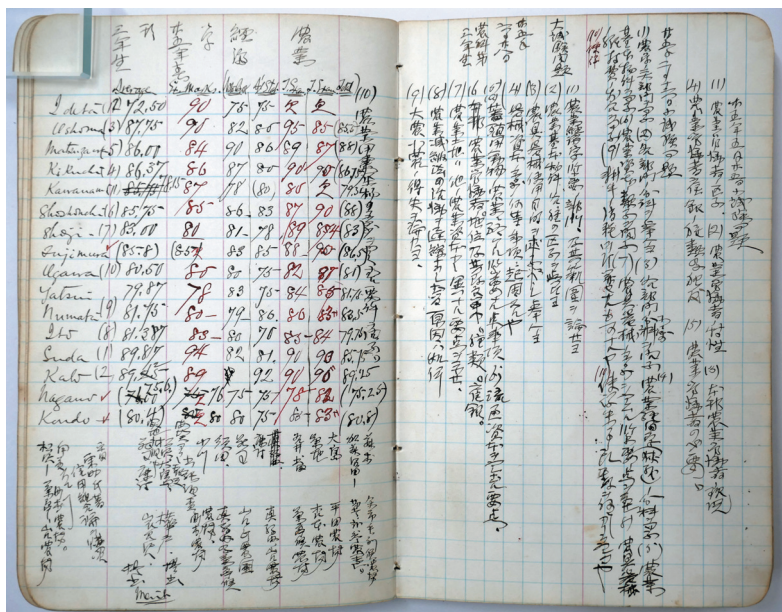
札幌農学校受講ノート249

札幌農学校生逢坂信彦（1882-1981年）が記録した受講ノート。逢坂は農業経済学を専攻する、謂わば佐藤門下の学生であったが、何度も留年を繰り返した。受講ノートには所々に落書きがあり、特に佐藤の後頭部を描いた「校長ノ禿頭」が得意であったようだ。在学中、佐藤には随分と叱られたが、非常に尊敬していたと回想している。逢坂は後に牧師となった。



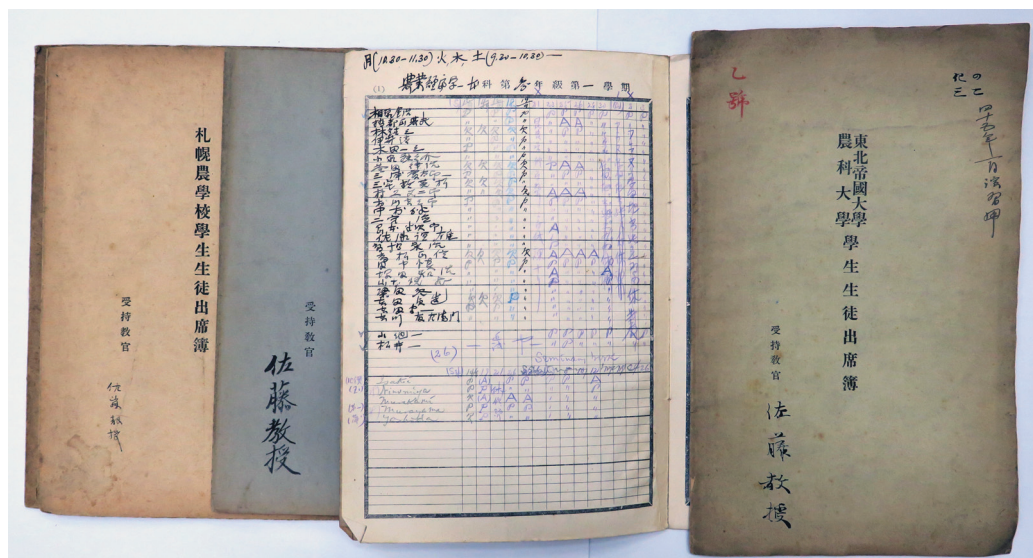
Ⅲ-7 佐藤昌介講義手帳 (1892年) 沿革資料 (手帳)

佐藤昌介が担当していた農学科 (本科) の「農業経済学」の講義の学生出欠状況、試験問題、試験点数などを記した、いわゆる「閻魔帳」。札幌農学校第11期生の学生名の記載が見られる。



Ⅲ-8 佐藤昌介講義の学生出席簿 (1904-1913年) 沿革資料 (帳簿)

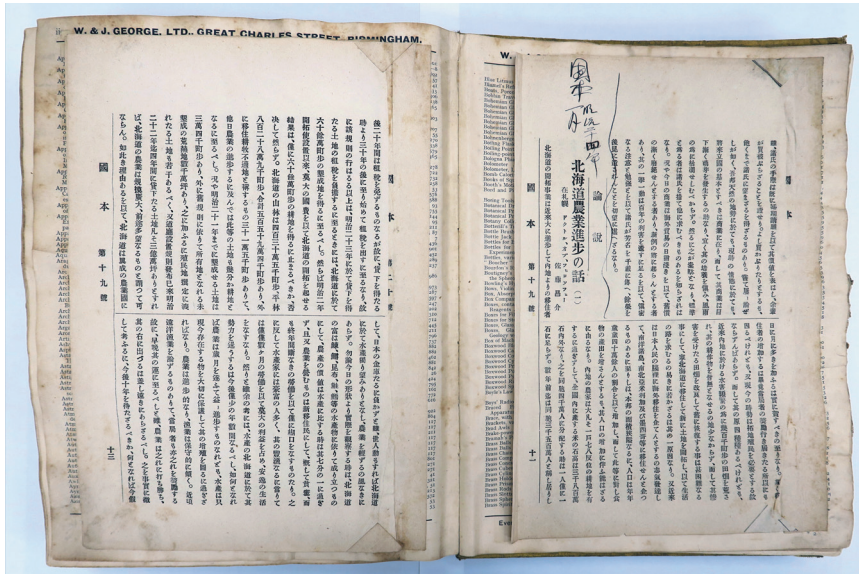
札幌農学校、東北帝国大学農科大学時代のもの。学生の講義への出欠状況を記録している。



Ⅲ-9 佐藤昌介「北海道農業進歩の話」(1891年)

佐藤カツミ氏・佐藤ユリ氏寄贈 (スクラップブック)

佐藤昌介が雑誌『国本』第19号に発表した論説文。様々な統計資料を根拠に「北海道の農業は規模広大、前途多望なるもの」と論じている。統計資料を駆使した農業経済学研究は、佐藤門下に受け継がれていく。

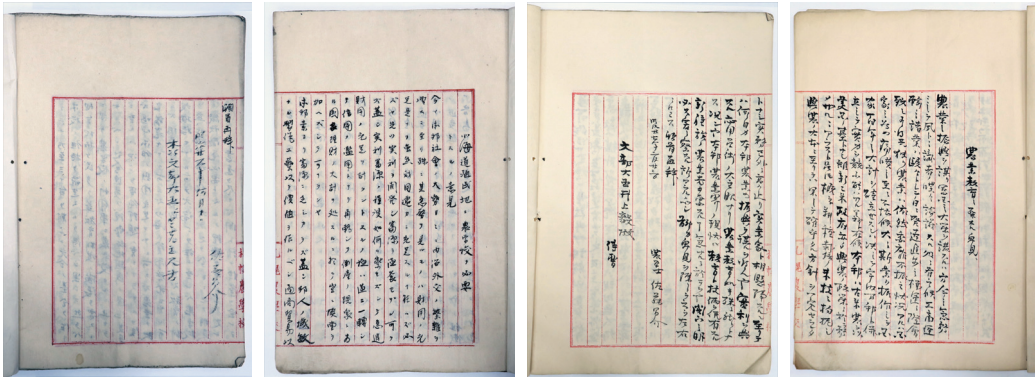


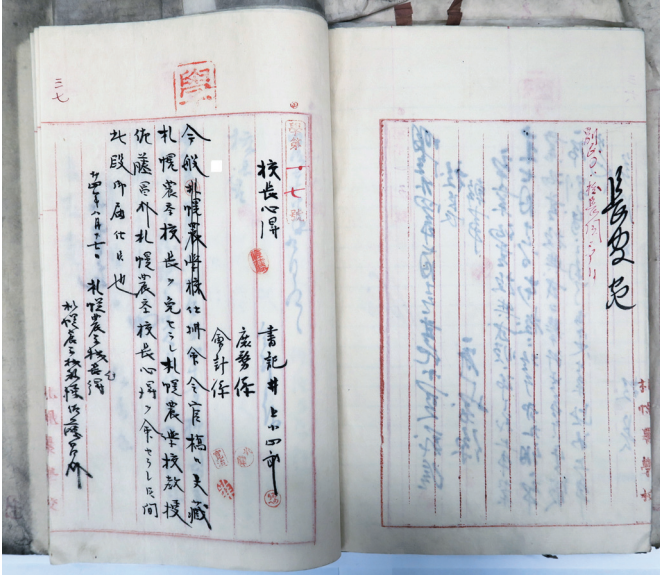
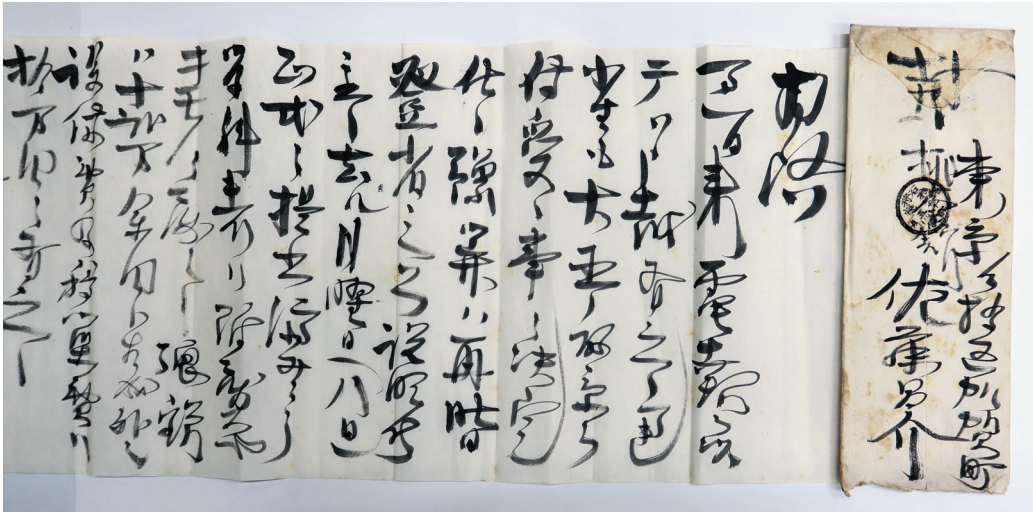
Ⅲ-10 佐藤昌介「学究今古」扁額 (1924年)

越山澄子氏寄贈 (墨蹟・扁額)

佐藤昌介が、教え子であり北大教授となった中島九郎 (1886-1959年) に書き与えた書。「学究今古」は一生涯、学問に勤しむ姿勢を意味する。「北海農人」は佐藤が書をしたためたときの号。



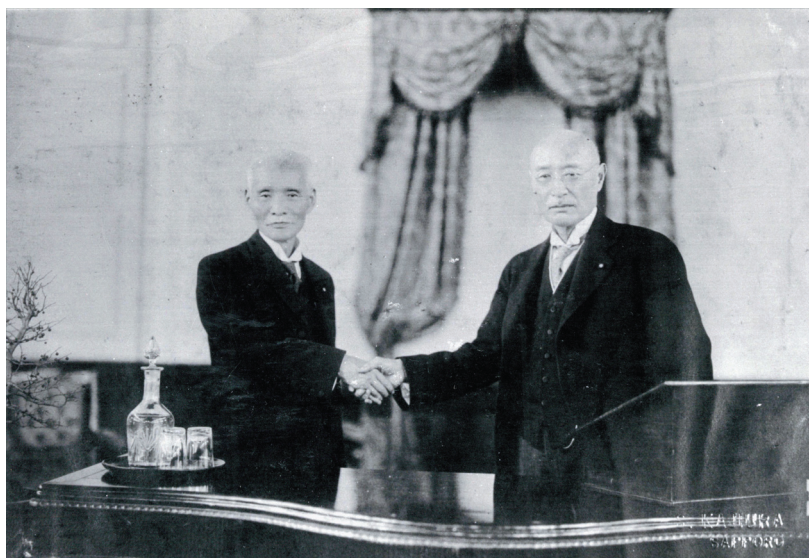
IV. 校長・学長・総長として	
IV-1	佐藤昌介肖像画 (有島生馬作、1912年)
佐藤ユリ氏寄贈 (額装・油彩画)	
佐藤昌介は1891年に校長心得に就任して以降、校長・学長・総長として40年以上に渡って北大を牽引し続けた。肖像画作者の有島生馬 (本名: 有島壬生馬、1882-1974年) は白樺派を代表する画家。生馬の実兄、作家の有島武郎は、札幌農学校卒業生 (第19期生) で、卒業後教壇にも立った。佐藤の教え子であった。	
	
IV-2	佐藤昌介「北海道殖民地ニ農学校ヲ必要トスルノ意見」(1888年)、 「農業教育ニ関スル卑見」(1894年)
沿革資料 (手稿)	
「札幌農学校の教育は高尚に過ぎて北海道「開拓」の役には立たない上、経費の無駄である」との批判は、常に札幌農学校に向けられていた。その度に佐藤昌介が代表して、札幌農学校の必要を訴え、政府要路・有力者の説得に当たった。「北海道殖民地ニ農学校ヲ必要トスルノ意見」は森有礼文部大臣に、「農業教育ニ関スル卑見」は井上毅文部大臣に提出した意見書。特に能吏型の切れ者であった井上毅は手強い相手だったと佐藤が後に回想している。	
	

IV-3	佐藤昌介の札幌農学校校長心得任命に関する文書（1891年 8 月）
	札幌農学校簿書425
	1886年に札幌農学校教授となった佐藤昌介は、1891年校長心得に就任した。以降、札幌農学校長（1894-1907年）、東北帝国大学農科大学長（1907-1918年）、北海道帝国大学総長（1918-1930年）を歴任し、40年以上に渡って北大を牽引した。 
IV-4	宮部金吾宛て佐藤昌介書簡（1899年 5 月11日）
	宮部金吾宛て佐藤昌介書簡012
	札幌農学校長佐藤昌介は、農学校の大学昇格について文部省に要望し、文部大臣へ説明するため、東京に出向いた。文部省との折衝が難航している様子を、札幌で留守を預かる植物学教授宮部金吾（1860-1951年）に書き送っている。 

IV-5	新旧総長の交代式 (1930年12月、中央講堂)
------	--------------------------

百年史編纂写真0916

理学部開学を見届けた佐藤昌介から、南鷹次郎 (札幌農学校第2期生) へと引き継がれた。

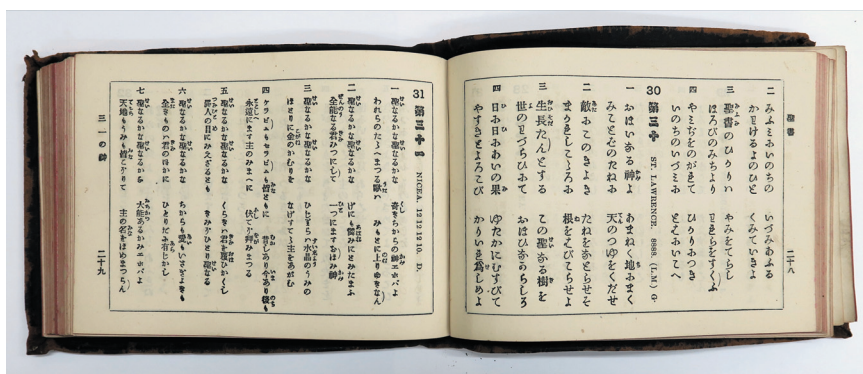


V. 佐藤昌介アラカルト

V-1 『新撰讃美歌』 (1889年)

沿革資料 (刊行物)

佐藤昌介旧蔵の讃美歌集。佐藤が札幌農学校に入学する以前からの友人で、日本の代表的プロテスタント指導者となる植村正久 (1958-1925年) が編集したもの。佐藤が属したメソジスト教会では、讃美歌を大切にしていた。

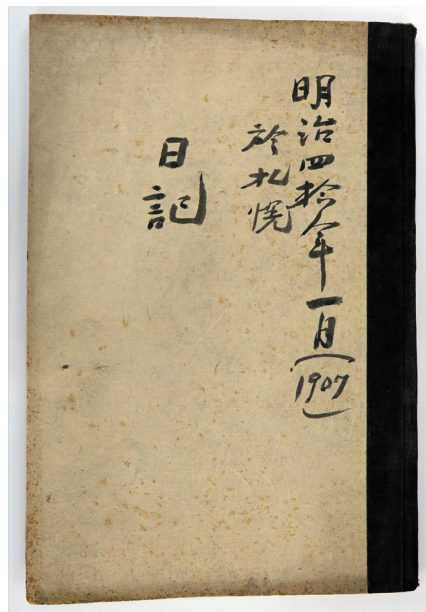
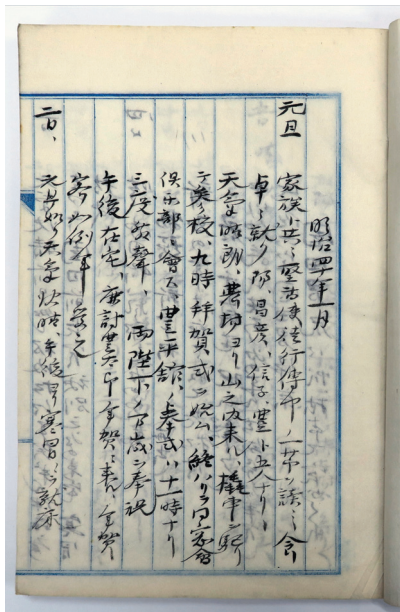


V-2

「日記 明治四拾年一月（1907） 於札幌」

沿革資料（日記帳）

佐藤昌介の1907年の日記。元旦に「家族ト共ニ聖書使徒伝中ノ一節ヲ読ミ食卓ニ就ク」と記している。敬虔な信仰生活を垣間見ることができる。

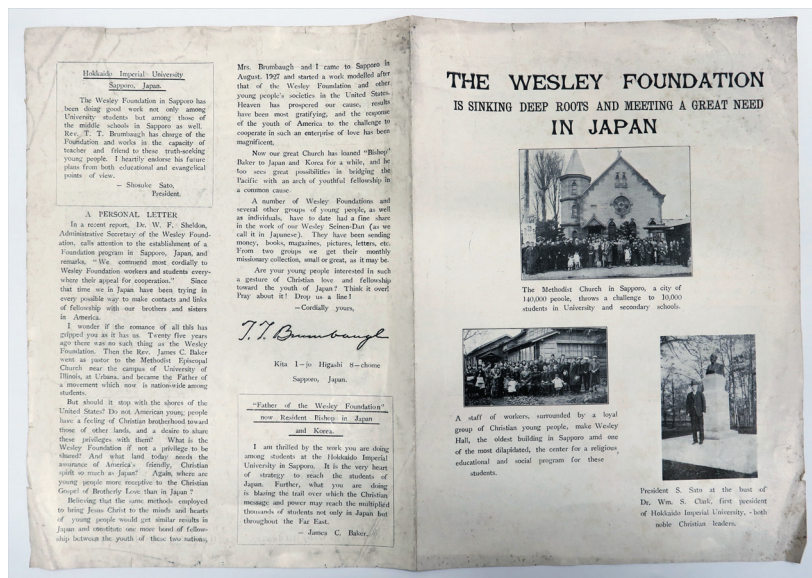


V-3

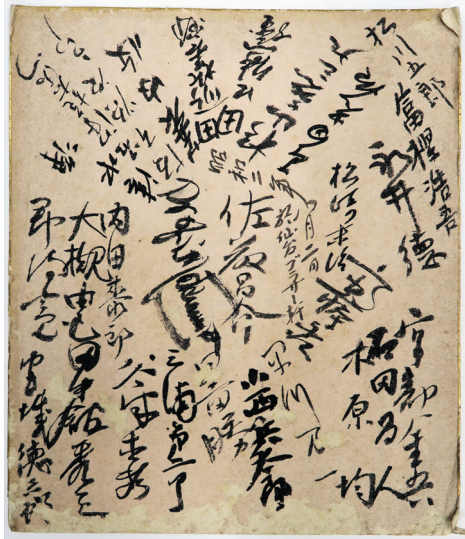
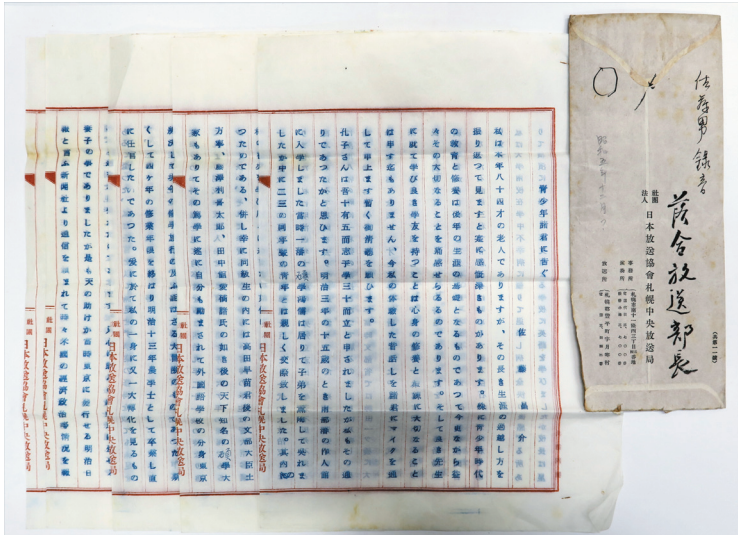
札幌美以（メソジスト）教会の英文リーフレット（1920年代後半）

沿革資料（刊行物）

佐藤昌介は札幌メソジスト教会（現在の日本キリスト教団札幌教会）においても重きをなした。佐藤が建設にも携わり、通っていた教会堂は現存する（中央区北1東1）。札幌軟石で1904年に建築した建物は国の登録有形文化財に登録されている。



V-4	「婦人と新文明」(1919年) 佐藤カツミ氏・佐藤ユリ氏寄贈 (スクラップブック) 佐藤昌介が新聞に発表した論説。「女子の為に高等教育機関の門戸を開放する事が時代の要求なり」と明言している。実際、1918年に加藤セチが女性として初めて北海道帝国大学農学部に入學する際にサポートを行なった。この他、東京女子大学理事や遺愛女学校(現在の遺愛女子中学校・高等学校)理事長を務めるなど、女性の教育機会拡大に熱心であった。 
V-5	佐藤昌介の在職25周年記念絵葉書(1912年)と、胸像除幕式記念絵葉書(1932年) 絵葉書関係資料0001、0164 佐藤昌介胸像は1943年に金属類回収令のため供出した。現在、大学事務局前に建立している胸像は大学の創基80周年を記念して1956年に再建したものの。  

V-6	佐藤昌介を囲む寄せ書き色紙（1927年8月2日）
越山澄子氏寄贈（色紙）	
1927年8月2日、仙台ブラザー軒に集った北大関係者の寄せ書き。佐藤昌介、木原均、田所哲太郎、田中館秀三、富樫浩吾、石田昌人など、北大関係者・卒業生の名前が見られる。理学部創設（1930年）準備の仕事と関わって開催した集いと思われる。ブラザー軒は仙台の老舗洋食レストラン。	
	
V-7	佐藤昌介「青少年諸君に告ぐ」（1939年）
沿革資料（書簡）	
佐藤昌介が最晩年に札幌中央放送局（現在のNHK札幌放送局）のラジオ放送のために集録した講演の原稿。札幌農学校入学前の東京遊学時代から農学校教授に就任するまで、15-30歳の修養時代の経験を語っている。「青少年時代の教育と修養は後年の生涯基礎となるもの」と述べている。	
	

V-8	「青少年諸君に告ぐ」のラジオ集録を伝える新聞記事 (1939年)
	沿革資料 (スクラップブック)
1939年 5月26日付け『小樽新聞』。4月20日に佐藤昌介が「私の経験が、後世の青年に他山の石となれば」との目的でラジオ収録を行なったと記している。同年6月5日に84歳で逝去した佐藤が、最後に公の場で伝えたのは、若者への鼓舞であった。	
	
V-9	佐藤昌介が愛用したシルクハット
	沿革資料 (帽子)
大学の式典や、公的な行事に参列した際などに着用していた。	
	

佐藤昌介の大学葬の式次第（1939年6月8日）

沿革資料（スクラップブック）

1939年6月5日に逝去した佐藤昌介の大学葬を6月8日に農学部本館前で実施した。賛美歌斉唱、聖書朗読、祈禱など、キリスト教色の濃い葬儀であった。戦時期に官立学校でキリスト教形式の大学葬を実施したのは極めて異例であった。このことは、佐藤昌介がいかに敬虔なクリスチャンであったか、そして北大にとっていかに重要な人物であったかを示している。

